

ヨコハマアートサイト

季刊
vol. 046
2026

ROJIURAKA 実行委員会「第4回ロジウラート」の「さをり織り」体験コーナーで見られた世代を超えた交流の様子



〔特集〕 身近にあった、ハーモニー

特集
— 身近にあった、ハーモニー —

横浜では地域の身近な場所で、人と人がゆるやかにつながるコミュニティが生まれています。自分のそばにいる人に声をかけてみたり、身の回りの素材、日用品から創作のアイデアを考えたりすることが、つながりのきっかけになっています。

そうした手づくりの場所は日常の延長線上にあり、他者との関係やまちとのつながりを少しずつ編み直し、地域との新しい向き合い方を育んでいく力をもっています。



ROJIURAR!実行委員会 「第4回 ロジウラート」会場風景。地域作業所の利用者が描いたエネルギーあふれる絵に足を止める来場者



スパイスアップ 「第2回 音の竹フェス♪」舞台風景。フィナーレは参加した演奏者が全員で一緒に演奏。会場では思わず立ち上がって踊り出す子どもたちの姿も見られた



ルロット・オーケストラ 「楽器の国のフシギな舞踏会」での演奏の様子。手づくり楽器にはトイレの清掃道具を用いたものもあり、会場をにぎわせた



「第4回ロジウラート」開催風景。会場の都筑民家園は、区内の牛久保地域から移築された民家・旧長沢家住宅を中心に屋敷林、茶室、竹林、池、庭が楽しめる

ROJIURArt 実行委員会

まちに路地裏をつくる

秋晴れが穏やかな週末の午後、「第4回ロジウラート」が開催された都筑区の都筑民家園から、ふと聞こえてきたのはハーモニカの和やかな音色。大人から子どもまで、みんなが縁側に座って耳をすませている。古民家を囲むように池や竹林が楽しめる庭園には10回



会場を優しい音色で包むハーモニカ奏者の演奏

体による出店や体験コーナー、展示が立ち並ぶ。その中を来場者は歩いたり、ひと休みしながら思い思いの時間を楽しんだ。

都筑区は港北ニュータウンが区域の約半分を占め、住民の平均年齢が低く、古くから農業も盛んな一方、生活のほとんどが車移動と大型商業施設によって完結してしまうという課題を抱えている。ROJIURArt(ロジウラート)実行委員長の柏崎久恵さんは「私たちは、都市開発の中で地域から姿を消してゆく路地裏に入りこんだようなイベントを作ろうと思いました。身近な体験の場や新しい出会い、発見の場がまちに

あったらいいなと思ったんです」と話す。ロジウラートとは路地裏+アートの造語だ。

過去と現在、未来がつながる場所

ロジウラートはかつての暮らしの営みが息づく都筑民家園に、アートをきっかけとした人々のつながりを育んだ。かつて福祉施設を中心に広がった「さをり織り」は、現在では織機を廃棄する施設も増えた。しかし、このイベントで体験ワークショップを開催したところ、またたく間に人だかりができた。会場では高齢者から手仕事を教わる子



手作りボードゲームに夢中になっている少年たち

どもたちの姿があり、伝統的な手仕事の魅力を次世代へつなぐ可能性につながっている。また、地元の間伐材を使ったワークショップを始めとした親子で楽しめるブースや、若者が制作した絵画やハンドメイド作品によるアートマーケットもにぎわいを見せ、子どもたちは表情を輝かせた。

そんな中、温かなけんちん汁がふるまわれた。柏崎さんは「例えば種から命を育てて、畑から採れた野菜でスープをつくることも、とてもクリエイティブだと思うんです。メニューは不登校の子どもたちも一緒に考えました。この場所や文化を引き継ぐためには、若者の存在が大切です」と語る。自分のアートの感覚を福祉や地域、まちづくりに生かしたいという志をもった若者が、団体の活動に興味を持って訪ねてくることもあるそうだ。

つながりが形になるとき

このイベントは来場者にとって、アートを通して障害や福祉を考える貴重な機会になっている。柏崎さんは、自分とは違う感性に出会うことを楽しみ、二度と同じものは生まれないアートに唯一無二の魅力を感じるという。会場内には、障害のある作家の絵画や立体作品等の力作が紹介され、作者本人と来場者が交流する場面も見られた。こうした来場者と作家の交わりは、柏崎さん自身のこれまでの日常における身近な出会いや関係性の延長線上に起きたものだ。「私たちは当初、『障害のある人たち』『不登校・ひきこもりの人たち』『地域の資源活用』の三つを軸にイベントを始めました。活動を続けていくうちに、今では互いに自然と溶け合ってきました」と柏崎さんは振り返る。さまざまな人と共に場をつくり続ける中で、それぞれの表現や関わりが重なり合い、地域の中に新たな風景を生み出していく。



手仕事や表現を通じて人と人が関わり合いながら、

都市開発の中で希薄になりがちな

地域のつながりを見つめ直す

茶室の縁側に並ぶ個性豊かな絵。アートを囲んで、人と人が自然に交流する



空の下、夢中で手を動かす。ワークショップでは、色々な素材を組み合わせた個性が光る作品が次々と生まれました。



色とりどりの糸を丁寧に重ねて。大人も子どもも夢中になれる糸かけワークショップ



茅葺き屋根の下、囲炉裏の傍で。古民家の中は、さりを織りの機音や色鮮やかな絵画に囲まれた豊かな展示空間が広がった。

ROJIURARt 実行委員会

<https://artrojiurart.wixsite.com/rojiurart>

素材から始まる地域の対話

スパイスアップは青葉区を拠点に、住民同士のつながりを生み出す団体として活動している。コミュニティをつなげるきっかけとして着目したのは横浜北部に多く見られる竹林だ。放置竹林による竹害や、相続時の管理継承の課題に対し、住民とともに考える取り組みが重要性を増している。2021年に団体が独自に立ち上げた「SOZ Ai循環 Lab」では、竹を始めとする素材の実験として楽器をつくったり、染料や墨にして絵を描く活動をしている。目先の課題解決よりも、素材に新たな価値を生み出すことを目的とする活動だ。

また、小中学生やフリースクールに

通う子どもたちを対象に環境教育の出前講座を実施。竹の生態や環境問題を学びながら、自由な発想で新しい使い方の方のアイデアを探っている。スパイスアップ代表の柏木由美子さんは「子どもたちの創造性はすごいですよ。大人には思いつかないような素朴な疑問を大切にしながら課題に向き合っています。私たちは先生ではなく、社会の中にいるひとりの人間として、名前でも呼んでもらっています。一緒に活動する仲間をつくっている、そんな感覚です」と話す。

音色がつなぐもの

青葉区民文化センター フィリアホー



ルで開催された「第2回 音の竹フェス♪」は、スパイスアップの活動を起点とした地域のコミュニティが一堂に会する機会となった。ホワイエでは竹についての学習成果が展示され、フリースクールや通信制高校サポート校に通う学生たちがボランティアとして関わった。演目には、竹でできた和楽器の篠笛やインドネシアや南米など、世界各地の竹楽器の演奏者が勢揃い。小学生から高齢者まで、多くの来場者が竹の温かみのある音色に耳を傾けた。

すすき野地域ケアプラザでの竹楽器ワークショップから生まれた「御嶽の竹楽団」も演奏を披露した。楽団には、普段から竹で包んだおこわ作りを共にするなど日常的な交流を続けている若年性認知症支援を行う事業所からの参加もあった。柏木さんは「竹の新しい可能性をアートを通して見つけたいです。地域で生活する人にその魅力を発信して、放置された竹林を素敵な場所に変えていくことを目指していきたい」と語る。身の回りにあるものから創造することが、人と地域をやさしく結び直し、まちの未来を育てていく。

竹楽器ワークショップの参加者が手づくりした竹楽器で演奏を披露した「第2回 音の竹フェス♪」舞台風景



放置竹林という課題を、創造の種へ

スパイスアップが立ち上げた実験室



「SOZ Ai 循環 Lab」

竹についての出前講座の展示

ルロット・オーケストラ

身近な場所へ音楽を

ルロット・オーケストラは、クラシック音楽をより身近に届けるため、自ら地域へ出向いて演奏する6名編成のオーケストラだ。彼らが大切にしているのは、ホールの舞台に立つことよりも、公民館やコミュニティセンターといった生活に近い場で演奏し、目の前にいる聴き手とふれあうことだという。磯子区民文化センター 杉田劇場での公演「楽器の国のフシギな舞踏会」では、子育て世代は高額なコンサートに足を運びづらいという現実にも向き合い、子ども食堂や海外にルーツを持つ親子のネットワークを招待した。演奏で使う楽器は、ピアノやバイオリンだけではない。フライパンやペットボトルといった日用品による手づくり楽器も音を奏で、会場は笑顔に包まれた。ルロット・オーケストラ代表の濱川慎司さんは「私たちの演奏を、コンサートやオーケストラを初めて体験する人にこそ届けたい。クラシックは退屈だ、というイメージを壊したいのです」と話す。

地域が奏でたハーモニー

公演の演目は、杉田劇場との連携をきっかけに、地域で活動するアーティストとともに作りあげられていった。杉田劇場が力を入れているオペラ形式での童謡メドレーのほか、磯子区出身である美空ひばりの楽曲を盛り込んでみると、彼女の母校の働きかけが集客の大きな後押しとなり、当日はほぼ満席となった。子どもたちが興味を示すと、家族が同行し、さらに祖父母世代が楽曲を楽しみに足を運ぶという広がり生まれた。

また、杉田劇場を拠点に活動する地域参加型のリコーダーアンサンブル「杉劇リコーダーズ」も登場し、ルロット・



「楽器の国のフシギな舞踏会」舞台風景。ルロット・オーケストラと杉劇リコーダーズが共演



さまざまな背景をもつ人たちの日常に寄り添う

ルロット・オーケストラの公演が、

共に過ごす居場所を創り出す

オーケストラとの共演が実現した。「杉劇リコーダーズ」は経験や年齢を問わず地域の人が集い、演奏活動や公演を通して、音楽を身近に楽しむ場をつくり続けている地域参加型のリコーダーアンサンブルだ。濱川さんは、「人は誰も自分が必要とされている場所が必要だと思うんです。そんな居場所を自分の手で作り出している地域のアーティストたちと共演できたということで、磯子区民のみなさんに楽しんでもらえる公演づくりを考えていきたいという意識につながりました」と話した。

音楽が鑑賞するものから、地域の中で人々が共に過ごす時間を共有するきっかけへと姿を変える可能性が生まれている。



終演後、手づくり楽器を実際に鳴らして体験する子ども

ルロット・オーケストラ

<https://www.roulottes.net/>

テーマ 「私」が生きる居場所のつくり方

ゲスト リーナ(STAND Still代表)

佐光正子(NPO法人コミュニティ・ネットワーク・ウェーブ理事長)

聞き手・進行 田中真実(ヨコハマアートサイト事務局)

日時 2025年12月1日(月) 18:00~19:30

会場 アートフォーラムあざみ野3Fアトリエ



ラウンジの様子。登壇者はDVや性暴力をなくすための啓発シンボル「パープルリボン」にちなんで紫色を身に着けた



今回のアートサイトラウンジでは、「『私』が生きる居場所のつくり方」をテーマに、性暴力やDVのサバイバーである人たちによる表現活動と、相談・支援の現場の両面から、地域における居場所のあり方を考えました。会場は、STAND Stillによる写真展が開催されたアートフォーラムあざみ野です。

性暴力サバイバーによる写真表現の場をつくるSTAND Still代表のリーナさんは、自身の被害経験を背景に、写真を通して「語る／語らない」を自分で選び取れる表現の場を育んできました。写真に意図せず映り込む感情や内面を手がかりに、参加者は自分の思いを確かめ、展示や朗読を通じて他者と思い共有していきます。回復を急がせず、安全に表現できる環境が、当事者のエンパワメントにつながっていることが語られました。

DVや性暴力被害を受けた女性の地域拠点づくりに取り組む佐光さんは、住まいや居場所、セルフケア、啓発等を通じた中長期支援の実践を紹介

しました。女性支援ボランティアサポート養成講座での合言葉は「だいじょうぶ、そばにいるよ」。日常生活における選択を取り戻し、人とのつながりを再構築できる場を地域に開いてきたといいます。被害を個人の問題にせず、社会や地域の課題として共有することの重要性も強調されました。

クロストークでは、表現や居場所は一直線の回復を目指すものではなく、行きつ戻りつしながら自分を取り戻していくプロセスであること、当事者にとって安心な場と、さまざまな人が交わる開かれた場の両方が必要であることが確認されました。誰もが個人として尊重され、離れても戻ってこられる居場所があることが、安全感や希望につながるという視点が共有されました。

本ラウンジを通して、暴力の経験をなかったことにせず、表現や居場所を通じて社会に開いていくこと、そして当事者而非当事者が共に関わりながら地域を変えていく可能性が示されました。

ヨコハマアートサイトラウンジとは

地域におけるつながりやネットワークを広げ、コミュニティの活性化を図ることを目的とし、横浜というまちでアートと地域の関わりについて考える交流と研修の場です。

事務局うろうろ日記

ヨコハマアートサイト事務局は、
今日も横浜市内のあっちこっちへうろうろしています

11月10日 月曜日



アーティストネットワーク+コンパスによる「会社から地域へまるごとギャラリー2025」へ足を運んだ。マップを片手に、金沢区福浦・幸浦を中心とする産業エリアでアート作品を探しながら散歩した。モノレールからの景色や地域グルメを楽しみながら、金沢区の地域の移り変わりに思いをはせる一日となった。

12月1日 月曜日



横浜市民ギャラリーあざみ野のフェローアートギャラリーでは、ラウンジスペースで社会福祉法人友愛学園成人部「工房YUAI」で活動する作家を紹介。障害の有無にかかわらず、人々がアートを通して出会い、相互理解へとつながる機会をつくるのが目的だ。この場所ではくつろぎながら絵を見つめる市民の姿が見られた。

12月13日 土曜日



南区中村町に2025年9月、誕生した文化拠点「ザ・シティイ」で演劇チームのザジ・ズーによるこけら落とし公演が上演。かつての工場跡を利用した舞台では、ガレージのシャッターが幕の代わりだ。演者が登場するシーンから熱意が伝わってくる。併設されたカフェのホットコーヒーとともに、まちが少し温まったように感じた。

12月19日 金曜日



ジャズ喫茶保存会が運営する中区のリビングルーム・ミュージッククロニクルYokohamaで「ジャズと街の記憶と記録・街の灯」を鑑賞。ジャズの物語が写真と文章で語られた。横浜ジャズ文化は戦後の米軍進駐の影響を受けて発展。かつての横浜のムードに溢れた夢のような情景の数々と同時に、戦後史を垣間見ることができた。

ヨコハマアートサイトとは

横浜市地域文化サポート事業。地域課題に対して文化芸術の持つ創造性でアプローチし、地域コミュニティに寄与する取組を支援する事業です。

事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局（認定NPO法人STスポット横浜、横浜市にぎわいスポーツ文化局）
〒220-0004 横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビルB1F（認定NPO法人STスポット横浜 地域連携事業部 内）
TEL：045-325-0410 FAX：045-325-0414 MAIL：office@y-artsite.org WEB：https://y-artsite.org
SNS：https://twitter.com/Y_Artsite https://www.facebook.com/yokohama.artsite

季刊ヨコハマアートサイト vol.046

発行：ヨコハマアートサイト事務局
編集：認定NPO法人 STスポット横浜 編集協力：大谷薫子 取材・テキスト：小川智紀、松橋萌、田中真実 イラスト：松橋萌 写真：前澤秀登
デザイン：岡部正裕 印刷・製本：共進印刷株式会社 発行日：2026年3月31日
季刊誌についてのご意見・ご感想もお待ちしております。